

授業づくりの基礎と視点

熊本県教育委員会は、誰一人取り残さない学びの保障と児童が学びの主体となる授業の充実に向け、学習の基盤となる資質・能力（読み解く力等）を高める取組を推進するとともに、これまでの授業を「読み解く力（教科書等を正確に読み、思考し、表現する）」で見直すことで、児童生徒が自ら学びを進め、課題を解決する力の育成を目指している。

1 基礎

（１）授業の準備ができているか確認する

- ① 教科書等の学習に必要なものがそろっているか確認する
- ② 準備が不十分な児童を把握し、必要に応じて対応する
- ③ 机の上のどこに何を置くかを決めておき、確認する
- ④ 筆記用具の使い方を指導する（鉛筆の持ち方など） 等



実態把握をした上で、以下の視点で児童に指導し、見取り、価値付けましょう

2 正確に読む

（１）教科書を正確に読む（実践例）

- ・ 巻頭の「教科書の使い方」で、どこに何が掲載されているかを把握する
- ・ 教科書等で見ている場所や読んでいる場所を指やペンなどで指す
- ・ →文章中の言葉をとばさずに読む（キーワードだけで読まない）
- ・ 図や表、グラフの題名及び軸、１目盛りの値及び単位を確認する
- ・ 図や表、グラフの着目するところに矢印や線、囲みをかき込みながら特徴を読む
- ・ 文章と写真や図、表、グラフ等のどこがつながっているのか線を引いて視覚化する

（２）学習用語を理解する

- ・ 既習の学習用語は、繰り返し使う
- ・ 新出の学習用語や調べた言葉に線を引いたり枠で囲んだりする
- ・ 学習用語は、声に出して確かめる
- ・ 学習用語を自分の言葉で説明する
- ・ 分からない言葉は、辞書や教科書で調べる 等

（３）思考する

- ・ 主語と述語を意識しながら、友達の話を聞いている
- ・ 生活経験や既習の知識、友達の考えと結び付けて考えている
- ・ 複数の写真や図、表、グラフ等を組み合わせて考えている
- ・ 整理したものを比較し、共通点や相違点を見つけている 等

(4) 表現する

- ・単語で終わらせず、主語と述語がはっきりと分かる文で話したり、書いたりする
- ・文末の最後の言葉まで話したり、書いたりする
- ・接続詞（まず、次に、しかし等）を使い、自分の考えを順序立てて話したり、書いたりする
- ・教科書にある言い回しや学習用語を用いて、話したり、書いたりする

3 「読み解く力」を高めるために定期的に取り組む活動例

(1) RS用ノート 15マス

日付 (月 日)

名前 ()

目標：() 字書く

(式)

書けた字数

字

(2) 重点指標を意識した授業づくり

読み解く力を高める

読み解く力

「①文章や図表等から必要な情報を正確に取り出し、それらを比較・関連付けて読み取り、②その意図や背景、理由を理解・解釈・推論して③解決したり表現したりする力」

①…正確に読む ②…思考する ③…表現する

【重点指標1】児童生徒質問

授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか。

【重点指標2】児童生徒質問

自分の考えを発表する機会、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していましたか。

【重点指標3】児童生徒質問

授業の内容はよく分かりますか。(各教科において)

読み解く力を高める

①正確に読む(読解力)

②思考する(判断力)

③表現する(協働力)

付けたい資質・能力

重点指標

指標1 授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいると思いますか1.



児童の活動:教師の指示・発問等=7:3

先生が話し過ぎると子どもは「聞けばいい」と思ってしまいます。逆に、少し考える問いかけをすると、子どもは自然と頭を動かし始めます。

課題提示のコツは、「子どもが“自分ごと”として受け取れる問いにすること」です。子ども自身が“考えざるを得ない状況”をつくると、自然と主体性が生まれます。

子どもに学習を委ねるのは、がまん力。

指標2 授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していると思いますか



発表は自分の考えを伝える場であると同時に、他者と考えをつなぐ場であることを意識

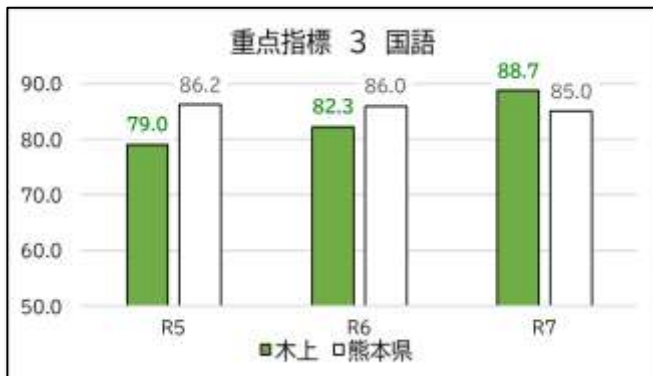
この視点があると資質・能力が自然に育ちます。

判断力:聞き手に合わせて何をどう伝えるか選ぶ

読解力:資料や情報を読み取り、必要な内容を整理する

協働力:聞き手の反応を踏まえて、伝え方を調整する

指標3 授業はよく分かりますか



1 単元デザインの工夫

- ① 単元のゴールを意識
- ② 文章への出会わせ方

2 授業デザインの工夫

- ① 「問い」や「見通し」をもたせる
- ② 教科書の言葉に着目して読ませる
- ③ 自分の考えを他者と共有する
- ④ 学んだことを再構築する

4 その他（報道より）

（１）読み解く力向上の取り組み

熊本県教育委員会は、2025 年度から小中学生を対象に、日本語の文章や図解を正確に理解する力を育成する事業を開始しました。特に小学5年生を対象に読解力テストを実施し、その結果を授業改善に活かす取り組みを行っています。県としてこのような読解力向上の事業を行うのは全国的にも珍しい事例です

（２）学力・学習状況調査の結果

熊本県では毎年、学力・学習状況調査を実施しており、国語・算数・英語などの科目で児童生徒の理解度を分析しています。調査結果からは、小学3～5年の国語や中学1・2年の国語で全国平均を上回る正答率が確認されており、読解力の基礎は一定程度定着していることが示されています。一方で、理解した内容をもとに自分の意見を整理して表現する力には課題が残っており、授業改善や教材開発の重点分野となっています。

（３）授業改善と家庭学習の支援

県教育委員会は、学力調査の結果をもとに授業の質を高めるための具体的な改善点を示し、児童生徒の思考力・表現力の向上を図る教材や学習活動の工夫を推進しています。また、家庭学習や読書習慣の充実も重要視されており、家庭での学習環境や蔵書数が学力向上に影響することが指摘されています。

職員の校内研修で拉致問題啓発「めぐみ」を視聴する意義は、単に拉致問題の知識を得ることではなく、人権教育を実践する教職員としての人権感覚や指導力を高めることにあります。「めぐみ」は、横田めぐみさんが13歳で拉致された実話を基に、家族の苦悩や救出活動を描いた作品であり、政府も「拉致問題を人権問題として考える契機」として学校での活用を推進しています。

研修の意義として、次の点が考えられます。

人権侵害を自分事として捉えること

拉致問題は、国家による重大な人権侵害です。「ある日突然、大切な家族を奪われる」という現実を知ること、人権は決して当たり前ではないことを実感できます。

人権教育の視点を深めること

学校では「いじめ」「差別」「偏見」など身近な人権課題を扱います。拉致問題も「人の命・自由・尊厳が奪われる」という点で、人権教育の重要な教材となります。

児童への指導力を高めること

教職員自身が問題を正しく理解することで、児童の発達段階に応じた適切な指導ができます。知識だけでなく、命や家族の絆、平和の尊さを伝える力につながります。

社会的課題への関心を育てること

拉致問題は現在も解決していない課題です。教職員が社会の課題に目を向けることは、主権者教育や平和教育の充実にもつながります。

【研修のまとめとして】

「めぐみ」は、北朝鮮による拉致問題を通して、一人一人の命や自由、家族とのつながりの大切さを考えさせる教材です。私たち教職員がこの問題を正しく理解し、人権を守る教育の担い手としての使命を再確認することは、児童一人一人を大切にする学校づくりにつながります。拉致問題を「遠い出来事」ではなく、「人権の問題」として受け止める姿勢を育てることが、この研修の大きな意義です。